

[学会]

第792回 千葉医学会例会 第二内科例会

日 時：昭和63年12月3日

場 所：千葉駅テリエホール

1. 神経ペプチドによる気道反応と neutral endopeptidase による調節

岩本逸夫 (千大)
J.A. Nadel(カリフォルニア大)

気道反応における神経ペプチド、とくにタヒキニンによる粘液分泌・血管透過性亢進作用を解析した。また、これら反応をタヒキニンを分解・不活化する Neutral endopeptidase (NEP) が調節しているか否かを検討した。サブスタンスP、ニューロキニンAとBは用量依存性に粘液分泌・血漿漏出を惹起した。NEP 阻害剤はこれらの反応を増加させたが、他のペプチダーゼ阻害剤は有意の効果を及ぼさなかった。

2. 血中リポ蛋白間の脂質転送機構 —転送阻害蛋白の存在とその性状解析—

西出敏雄 (千大)
J.J. Albers (ワシントン大)

血中リポ蛋白は相互間で、また細胞との間で脂質の交換・転送を行っている。この反応は脂質転送蛋白 LTP およびこの阻害蛋白 LTIP が制御しており、LTIP を分離精製し、その性状を検討した。分子量は29,000, pI 4.6であった。LTIP は LTP により転送されるコレステロールエステル、中性脂肪、リン脂質いずれも抑制し、血中リポ蛋白間の脂質転送に重要な役割を果たしているものと思われた。

4. シェーグレン症候群臓器病変における浸潤細胞の免疫組織学的研究

松村竜太郎 (千大)

シェーグレン症候群患者の口唇小唾液腺、皮膚紅斑、間質性腎炎腎生検における浸潤細胞を免疫組織学的に検討した。各臓器浸潤細胞はほぼ同一の性状を示し、CD5陽性細胞が過半数を占めた。CD19, CD15陽性細胞は約10%前後、CD16陽性細胞はほとんど存在しなかった。

T細胞サブセットではいずれも CD4陽性細胞主体であったが、唾液腺導管、尿管上皮細胞間に CD8陽性細胞の浸潤を認めた。同一の細胞群からなる病変と考えられた。

5. 全身性エリテマトーデスの腎組織像と血清 C3 値を指標としたステロイド療法

杉山隆夫 (千大)

未治療 SLE でループス腎炎は WHO 分類 I 型 8%, II 型 34%, III 型 23%, IV 型 21%, V 型 14% の比率でみられた。III・IV 型の検出には治療前の持続的血尿の存在が有用であった。血清 C3 値の正常化を目標としたステロイド療法の結果、5 年生存率は 91% であり、生存群 (94%) では有意に腎機能の改善がみられた。これより、血清 C3 値を指標としたステロイド療法はループス腎炎に対し有用であると思われた。

7. Goldthioglucose のラット胃液分泌に及ぼす影響についての検討

渡辺東也 (千大)

ラットに Goldthioglucose (0.3mg/g) を投与すると、出血性胃病変が出現する。GTG 投与により、胃粘膜血流量および胃粘膜内ヘキソサミン濃度に変化は認めないが、胃酸およびペプシン分泌量の亢進を認めた。迷走神経切除術は GTG による胃病変を抑制した。以上より、GTG による出血性胃病変発現には、迷走神経を介しての胃酸およびペプシン分泌亢進が関与していると思われた。

8. Neutral endopeptidase による好中球機能の調節

山崎博臣, 落合賢一, 木村 亮
岩本逸夫, 富岡玖夫, 吉田 尚
(千大)

Neutral endopeptidase (以下 NEP) が FMLP またはサブスタンスP (以下 SP) による好中球の活性化を